

---

# フレンド～友達だなんて思っちゃいけなかった～

思惟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フレンド〜友達だなんて思っちゃいけなかった〜

### 【Nコード】

N0905B

### 【作者名】

思惟

### 【あらすじ】

あなたの隣にいるのは友達ですか？学校生活での日常のある出来事。

友達だなんて思っ  
ちゃいけなかつ  
た。  
.....  
□

あれはいつもとなんらかわらない出来事だと思ってた。

いつもと同じようにふざけあってただけでも、あまりにも尚なほがしかったから。

殴ってしまった。

軽くだけど。

おまけにこんな事まで言ってしまった。

『馴れ馴れしいな。……ウザっ』

言った後すぐ後悔した。

あの時の尚の顔といったら……

一瞬、無表情になって笑顔に戻った。でもとっても寂しそうな笑顔だった。

『うわっ！ヒドイッ』

でもそう言ったからいつも同じで大丈夫だと思った。

いつもとかわないと。

そう思い込んでた。

勝手に。

次の日の朝。

尚はいつも遅刻ギリギリで学校にくる。

これはいつもの事。

5分前の予鈴が鳴る。

尚はまだ来ない。

「ねえ、明<sup>あき</sup>。尚<sup>あき</sup>って最近うざくない？」

何の話のつながりでこんな会話だったのか思い出せないけど、いきなり真衣がそう言い出した。

「そうかな？」

私は、はっきり言うことができなかった。

だって正直にいうと最近尚にイラつく事が少なくなかったから。でもそれをはっきり人前で言えるほどの私の怒りはなかった。

「私はだめだな。見てると本当にイラつく。しつこいんだよね。そう思わない？」

そういえば真衣は前々から尚を嫌っていた。

クラス替えしたばかりのときはそうでもなかったが慣れていくうちにお互い合わないのが分かったのか段々離れていった。

二人が合わないのは真衣が大人過ぎ、尚が子供っぽいからだろう。

「さあ？」

私はここで否定とか賛成とか決めるのが面倒で嫌で適当に返事を返した。

本当ならここで逃げずに素直に言うべきだった。

本鈴が鳴る少し前に尚が慌てて入ってきた。

真衣と話していたすぐ近くの後ろのドアから。

話を聞かれたかなつと焦ったが、尚は笑顔で元気よくあいさつしてきたからそれはないようだった。

尚はよく寝ていることが多いが、その日は尚は机に顔を伏せて寝ている時間がいつもより多かった気がする。

結局その日、尚とした会話は朝のあいさつと授業変更のことだけだった。

それ以外はいつもと特に変わりなく過ぎていった。

次の日。

尚はまた遅刻ぎりぎりであるのかなつと思っていたるうちに本鈴がなつてしまった。

尚は朝のホームルームが終わっても来なかった。連絡はまだ入っていないそうだ。

尚は1時間目が終わってもお昼になっても午後の授業が始まってても姿を見せなかった。1年の時から休んだことのない尚はその日以来なかった。

メールしても返事は返ってこなかった。

次の日、尚が休んだ理由が分かった。交通事故にあったそうだった。

確か尚は自転車通学だった。前に一緒に帰ったが尚の運転は見ていてもとても危なかった。軽い接触事故だったらしので怪我自体はそんなにひどくないらしい。来週には退院できるそうだった。心配で大丈夫かな？お見舞いに行こうと思ったが3日前のことが頭によみがえり行くのためだったが今はそんな事はいつてらないと思いい帰りたいこうと決心した。

その日の放課後。私は先生に尚の入院した病院を聞いて見舞いへと向かった。

尚の入院していたのは市内の総合病院だった。病室の名前の欄は尚だけようだった。病室のドアに手をかける。

なんだか、あけるのをためらってしまふ。

そんなふうに迷っていると、ドアの隙間から声が聞こえてきた。

泣きじゃくるような声にそれをなだめるような青年の声。

「うつうつ……ぐすつ……」

「大丈夫？」

「うつ……すぐる……」

「考えごとしながら自転車乗るのは危ないって前から言ってたろ。」

「……うん。」

そういえば前に尚が言っていた。年下の癖に私よりしっかりした、従姉妹がいると。名前は確かすぐる。

「来週から行けそう？」

「……行けない。」

か細く今にでも倒れてしまいそうな返事。

「友達とケンカでもしたの？」

「……違うよ」

澄んでいて悲しみがあふれだしそうな小さな声だった。

「じゃあ、どうして？」



「……クラスメートの……明ちゃんに……」

中々続かない言葉にすぐるが優しく問いかける。

「何があつたの？」

「嫌われてたの……明ちゃんに……友達だなんて思っちゃいけなかった……明ちゃん……グスッ……」

「…尚」

一つ一つの言葉から尚がどれだけ苦しみ泣いたのかが覗えた。<sup>うかが</sup>

尚は声をあげながら泣いてた。

その後どうなったのか私は知らない、尚の泣いている声を聞きたくなかったから。

尚の言葉が頭から離れない。

『友達だなんて思っちゃいけなかった……』

やっぱり聞いていたんだろう。一昨日の朝の真衣との話を。尚が泣く程、考え悩みこむなんて思わなかった。

普段から尚はいつも笑っていて感情がうまく読み取れなかったし、さつきみたいに泣いてるところも見たことがなかった。

はつきり言ってショックだった。

尚は傷ついたりしない。

普段の尚を見ているといつも笑ってて悲しむなんてしないような子だと勝手に思っていた。

身近すぎて、分からなくなってた。

尚がどんなときに怒って、いつ笑って、何の話をすると喜んだのか、そして何を言ったら悲しむのか。

ずっと近くにいたのに。

何1つ分からなくなっていた。

尚はなんでも笑って物事を流せるほど大人じゃなくて

十七歳のただの普通の女の子で

みんなと同じ絶妙で独特なバランスな感情の中にいた。

なにも言わないから、怒らないから、悲しまないから、

なにを言っても大丈夫だと思ってた。

本当は全然そうじゃないのに。

全然平気なはずなのに。

『友達だよ』って一言 真衣と話しているときにいえば尚はこんなふに悩んで泣かずにすんだかもしれない。

悩みすぎて事故にあうこともなかったかもしれない。

私は尚をちゃんと見ていなかった。

でも尚を嫌いになったわけじゃない。

ただ言葉がたりなかっただけ。

『友達だよ。』

明日に言いに行こう。

泣かせて悲しませてしまった尚に。

きつと今私は目が赤くて恥ずかしくて行けないから。

明日必ず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0905b/>

---

フレンド～友達だなんて思っちゃいけなかった～

2010年10月10日06時38分発行